

学 位 論 文 題 名

文化的背景におけるアンドレイ・プラトーノフ

『チェヴェンゲール』研究

学位論文内容の要旨

本論文は序論、第一章～第三章、結論、文献目録、及び露文要旨によって構成され、序論～文献目録はA4版横書き125頁、露文要旨は同3頁からなる。

本論文は、ソビエト時代の作家アンドレイ・プラトーノフ（1899－1951）の代表作『チェヴェンゲール』を文化的・社会的コンテクストにおいてとらえるとともに、その言語的特徴を考察することを目的とし、作品に描かれた架空の社会のユートピア的特徴、それらと民衆宗教との結びつき、言語・文体の特徴などの分析を通して、この難解な作品の全体像を明確にしようと試みている。

序論では、プラトーノフの生涯を簡潔に叙述し、生前は作品発表の場を奪われていたプラトーノフが「雪解け」期とペレストロイカ期以降どのように再評価され、現在までにどのような研究が行われてきたかを概括し、上記のような論文の目的を明らかにしている。

1926－29年に執筆された『チェヴェンゲール』は、革命から内戦、ネップの時期のロシア社会を背景として、チェヴェンゲールという架空の町に一種のユートピアが成立し、崩壊するまでを描いた長篇小説である。プラトーノフの他の主要作品と同様に、作家の生前にはほとんど発表を許されず（冒頭部分のみが雑誌に掲載された）、完全な形で出版されたのはペレストロイカ期の1988年である。

第一章「プラトーノフとユートピア文学」では、プラトーノフのユートピア観を考察している。筆者によれば、ロシア文学にはユートピア文学の二つの系譜が存在する。第一は、オドエフスキー『4338年』に始まり、チェルヌイシェフスキー『何をなすべきか』、A.ボグダーノフ『赤い星』等に継承された「進歩的ユートピア」の文学であり、もう一つは、ドストエフスキー『地下室の手記』や『おかしい男の夢』、ザミャーチン『われら』に代表される「反進歩的ユートピアの系譜」である。

前者の特徴である理性と科学への絶対的信頼は、プラトーノフの初期社会時評に明らかに見いだせる。そこでは、理性の力によって自然だけでなく人間をも統御する管理社会が理想として描かれている。こうした理想社会はソビエト最初の文化啓蒙団体「プロレトクリト」のユートピア観とも共通するものであり、プラトーノフが同時代の革命思想の影響を受け、新しい時代への熱狂の中にあったことを示している。また、プラトーノフの理性・

科学信仰には、自然統御と死者の復活を説いた19世紀の思想家ニコライ・フョードロフの影響も指摘できる。

しかしその一方で、プラトーフはドストエフスキーやザミャーチンらと同様に、科学や理性の完全さに疑念も抱き、民衆の生活観や宗教の根強さを認識していた。こうした相反する二要素の拮抗と融合が、初期のSF小説以来プラトーフの主要なテーマとなっている。『チェヴェンゲール』の中で登場人物は自分たちの理想社会を一貫して「共産主義」の名で呼び、それを実現したと信じているが、その実態は革命思想と民衆の宗教的生活観が結合した独特のユートピアだったといえる。

第二章「プラトーフの作品における民衆宗教的要素」では、プラトーフ作品の宗教的要素を検討している。『チェヴェンゲール』では、ロシア民衆の間でよく知られた「見えざる都市キーテジ」の伝説が物語の大きな枠組みとして用いられており、プラトーフの作品世界と民衆の世界観とのつながりがうかがえる。民衆宗教的要素の中で筆者が特に重視するのは、非正統的な古儀式派や各種のセクトとの関連である。

19世紀以来、ロシア民衆の根源的な宗教性の発現として古儀式派やセクトに関心を寄せた作家は多い。第2節「ロシア文学における古儀式派とキリスト教セクト」では、ドストエフスキー、メーリニコフ、レスコフ、メレシコフスキー、ペールイら5人の作家の作品の中で古儀式派やセクトがどのように描かれているかを概観している。

それを踏まえて第3節では、プラトーフと古儀式派・キリスト教セクトの関係を論じている。古儀式派やセクト各派に共通する特徴的な思想として、籍身、終末、改名、清貧、純潔、啓示、放浪の7項目を挙げ、それらが『チェヴェンゲール』のテキスト中にどのように現れているかを具体的に検証している。『チェヴェンゲール』の中で社会主義建設に悪戦苦闘する登場人物たちの行動は、一見ナンセンスで奇抜に思えるが、古儀式派・セクト各派の思想と比較することにより、その歴史的基盤と意味が明らかになる。ロシア民衆は、古儀式派や各種のセクトを担い手として、独自のユートピア的意識をはぐくんできたが、それが共産主義という新たなユートピア思想と衝突したとき、奇怪な混交体が生まれた。このようなさまざまな宗教的要素と新時代 of の思想や社会現象の交錯が、『チェヴェンゲール』の複雑な作品世界を作り出しているのである。

プラトーフは文体の特異さで知られ、多くの研究者がそれに注目してきた。第三章「プラトーフの言語」では、『チェヴェンゲール』の文体の独自性を分析している。プラトーフの文体の分析には、これまで、大きく分けて、作家の思想・内面世界に注目するアプローチと、社会的要因の反映を重視するアプローチという、二つの傾向が存在した。前者は、プラトーフの世界観や哲学的・思想的傾向の独自性が文体に表れていると見る立場であり、S.ボチャロフの論文「《存在の物質》」がその代表的な例として挙げられる。後者は、プラトーフの文体と同時代のソビエトの言語の結びつきを重視する立場であり、プラトーフの言語を「ユートピアの言語」と名づけたプロツキーや、M.ゲツレルの研究にその例を見ることができる。

筆者は作品で「Тело(身体)」という語が異様なほど数多く使われていることに注目し、この語の用法の詳細な検討を手がかりとしてプラトーフの文体の特徴を探っている。プラ

トーノフの作品ではしばしば、術語として定着している表現が元の意味へと「解体」され、直接的で感覚的な意味を与えられることがある。たとえば、「Живое Тело (生体)」という術語が「生きている身体」という文字どおりの意味に分解される。さらに、Телоに関わる言葉すべてが独自の意味を持ちはじめ「自律化」の現象も見られる。「身体」と対比されることにより、「心」も「魂」も「生命」も、「身体」から切り離された独自の存在となり、「自律化」していく。こうして、抽象名詞が物質的形狀を獲得し、身体・物質は逆に精神的で抽象的なものになり、概念と物質の区別が消えていく。このような特異な文体が、現実的であると同時に幻想的でもあるプラトーノフの独自の作品世界を作り出すのに寄与している。それはまた、精神と身体・物質的要素の親和という意味で、東方教会の思想とも深く関わっている。作品に表れたさまざまな次元の宗教的要素だけでなく、文体の特徴もまた、プラトーノフがロシアの精神文化に深く根ざしていたことを示しているといえる。

学位論文審査の要旨

主 査 教 授 安 藤 厚

副 査 教 授 宇都宮 輝 夫

副 査 教 授 栗生澤 猛 夫

副 査 助教授 望 月 恒 子

学 位 論 文 題 名

文化的背景におけるアンドレイ・プラトーフ

『チェヴェンゲール』研究

本審査委員会は、4回にわたる審議と口頭試問等を通じて、以下の点を確認した。

本論文は、難解とされるプラトーフの作品の中でも特に複雑な『チェヴェンゲール』を「ロシア・ユートピア文学の伝統」「民衆宗教的要素」「言語の独自性」などさまざまな視点から読み解き、作品の時代性や文化的背景について幅広く考察している。

プラトーフの作品は、1960年前後の「雪解け」の時代にいくつかの作品が出版されたほかは、ソビエト時代にはほとんど出版を許されなかった。そのため学問的研究も皆無に等しかったが、ペレストロイカ・ソビエト崩壊以降は特に大きな注目を集めるようになり、相当量の研究が世に出され、プラトーフについての専門的研究集会が定期的に催されるまでになっている。

本論文の筆者がそれらの先行研究をほぼ遺漏なく検討したことは、論文付録の引用文献目録によって確認できる。また、本論文の基礎となった先行の論文と本論文の対比から、筆者がロシア留学中にプラトーフ専門家から直接受けた指摘を積極的に取り入れていることも知られる。このような周到な準備と綿密な研究をもとに、本論文はプラトーフの作品について説得力のある独自の観点を提起している。

第一章で筆者は、19世紀以来のロシア・ユートピア文学の伝統の中に「進歩的ユートピア」と「反進歩的ユートピア」の二つの系譜が併存していたという理解と、プラトーフのユートピア観の中に理性と科学への絶対的信頼と民衆の宗教的生活観への強い愛着が共存していたという理解とを結びつけて、プラトーフは初期には科学信仰に熱中していたが、やがてそれを捨て去り宗教的傾向を強めていった、とする従来の通説に訂正を加える独自の見方を提起している。この見方は、論文の中ではプラトーフの作品の複雑な世界を整理して理解するための基本的な視点としても有効に機能しており、本論文の重要な成果としてまず第一に挙げられる。

プラトーフは党寄りの批評家からしばしば「宗教性」を批判された。最近では、ロシアにおける宗教ブームの影響もあって、プラトーフの作品の「宗教的要素」に注目した研究も多いが、その内容は必ずしも明確に定義されてはいない。

第二章では、これまで漠然と指摘されてきたプラトーフの作品における「宗教的要素」を、ロシアの古儀式派や各種のセクトに関連するものと明確に限定し、籍身、終末、改名、清貧、純潔、啓示、放浪の7項目や「キーテジの伝説」など具体的な例を挙げてこの結びつきを論証している。この点はきわめて斬新な観点であり、本論文の最大の功績として高く評価できる。この章の基盤となった学会報告は1995年度日本ロシア文学会「学会報告奨励賞」を受賞しており、筆者の見解は学界においてすでに一定の評価を得ているといえる。

第三章では、特異で難解なプラトーフの言語について、これまでの研究に見られるさまざまなアプローチを紹介したうえで、断片的な言及にとどまっていることの多い先行研究の限界を越えるため、分析の対象を作品における「Тело(身体)」の用法に限定するという禁欲的な方法を採用し、その結果、「術語の解体」、「身体と存在の分離」、言葉の「自律化」等の独自の概念を用いて、プラトーフの言語の独自性を体系的に説明することに成功している。この特異な文体が東方教会の思想とも深く関わっているという指摘も、議論の余地は残るものの、プラトーフの世界観と言語を統一的に把握するための視点として一つの有力な方向性を示唆するものといえる。

審査委員会では、各章相互の関連づけについてさらに工夫の余地があるだろう、第一章で述べられている「反進歩的ユートピアの系譜」という概念は、内容的に多少異質のものがひとまとめにされている感もあり、いまだし内容を整理する必要があるのではないか、第三章でプラトーフの文体を東方教会の思想の特徴と結びつけているが、この点については東西教会の思想の異同をめぐってさらに綿密な分析が必要だろう等の意見も出された。

これらの点は論文提出者の今後の研究の課題となるであろうが、上で述べたように、本論文の各章には独自の観点が見られ、全体としても、時代の特徴を正確に把握したうえであくまで作品に即して行われた論証には十分な説得力があり、関係学界においても貴重な貢献として受け入れられるものと期待できる。

本審査委員会は、以上を総合的に評価して、久保久子氏の論文は博士（文学）の学位を授与するにふさわしい研究業績であるとの結論に達した。